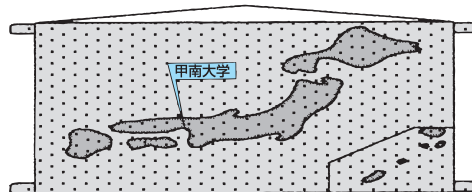


Zephyr

〈第89号〉

ゼフィール・にしかぜ


<https://www.konan-u.ac.jp/kilc>

《特集＊異文化理解をめぐって》

〔フランス語〕 フランスにおける異文化理解 ―異文化理解を超えて―	中村 典子	2
〔日 本 語〕 漢字語にみる異文化	谷守 正寛	3
〔国 際 理 解〕 国際理解に必要な知識と能力とは？① ～日本は世界の標準か～	小西 幸男	4
おすすめの本		6

甲南学園創設者

平生飢三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」

「英語＋1（第2外国語）」
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年2回刊行）

異文化について

「あなたの町の人まんじゅうが好きですか」などと聞くと、そんなことは「人によって違う」と答えるでしょう。はたしてまんじゅうを食べる食文化が個人で完結している、あるいは人は完全に自由意志でまんじゅうを好んで食べるのでしょうか。総務省統計局の家計調査をみると面白いデータがあり、二人以上世帯ではまんじゅうをよく食べる上位の市が鹿児島、鳥取、福島と続きます。ようかんは福井、三戸、長野、他の和生菓子では金沢、岐阜、奈良とごっそりそれぞれ入れ替わります。せんべいは山形、キャンディは堺など、個人ではみえない傾向が地域というマクロレベルで鳥瞰すると明瞭な違いとして露呈します。つまり、国・地域の文化の違いは人によって違うとは言い切れないことになります。地域差は個人の好みや考え方に反映され、異文化を生み出しているとみてよいでしょう。ただ100%そうではなくある程度の傾向です。カステラでは長崎市が例年一位なのは歴史的要因が決定づけているのでしょう。カステラが嫌いな長崎市民がいても巨視的にみると異文化として顕在化するわけです。

無意識に形成された観念や習性から解放された自分本位の文化の発現があるとしても限定的です。ただしそこから大きな個性を生むことはありえますが、日本ではこうだ、某国ではああだと単純に決めつけるとステレオタイプだと言われますが、ある程度の傾向としてとらえることはできるし、その異文化を鏡として自文化を知ることができれば面白いものです。

(谷守 正寛)

フランスにおける異文化理解 ―異文化理解を超えて―

国際言語文化センター兼任研究員 中村 典子

日本のスーパーマーケットとは異なり、フランスのスーパーマーケット (supermarché) では、客自身が商品を取り出して、ベルトコンベア式の台の上に並べ、「ここまでが私の分」とわかるように仕切り棒 (séparateur de caisse) を置きます。そして、レジ係の人に、客の方から「こんにちは」(Bonjour.) と挨拶するのが普通です。会計が終わった後は、客もレジ係も「ありがとう。さようなら」(Merci. Au revoir.) と互いに言うのが社会的なマナーです。もちろん、専門店でもデパートでも同じマナーですが、客の方から「見ていいですか？」(Je peux regarder ?) と先に言うのがいいでしょう。そうすれば、商品を手にとっても怪しまれることはありません。フランスのお店では、客が勝手に商品を触ることはタブー視されています。

2013年12月、「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録される以前から、世界的に人気となっている日本食ですが、オペラ座に向かって右側のサン・タンヌ通り (rue Sainte-Anne) 周辺には昔から、うどん屋、ラーメン屋、日本風の中華料理店、日本食材店などが並んでいて、筆者も留学時代は、日本食を食べたくなると、サン・タンヌ通りに行っていました。しかし、今や、パリの至るところに、寿司・焼き鳥などのレストランが乱立していると言われます。そのうちの多くが日本人経営ではないようなので、寿司などの生ものの場合は、注意が必要かもしれません。2024年3月に行ったレストランで食べた日本食はこんな感じでした。



13区の日本食レストランの店内



牛肉・鶏肉の串定食 (11,90€)



フランス人の好みは甘い醤油 (SUCRÉE)

大都市の大型スーパーだけでなく、小さなスーパーでも日本食のおにぎりや弁当などを陳列していることがあります。パリ空港のシャトルの駅 Roissypole の近くには複数のホテルがあり、駅の出口にコンビニ (営業時間：7時～20時) が設置されています。おにぎりやお弁当が並んでいて、パリのコンビニとは思えないほどです。そこでの出来事をお話します。

おにぎりや牛丼、飲み物、チョコレートなどをかごに入れ、私はレジに並んでいました。そのコンビニでは、5つのレジのうち4つが自動レジで、ガードマンが客を自動レジに誘導していましたが、私は無視しました。そして、インド系だと思われるレジ係の女性に「Bonjour.」と言って、かごを差し出すと、彼女は「なぜ自動レジへ行かないのか？クレジットカードを持ってないのか？」と英語で私に聞いてきました。そこで、私は（常に考えていることを）英語で次のように言いました。「I have my credit card, but I want you to operate your cash register.」…この言葉を聞いた彼女は「You are my friend!」と言って、笑みを浮かべてレジを打ちました。これは、異文化理解を超えた場面であったと考えています。



空港シャトルの駅 Roissypole



各 Onigiri (3,40€)、巻き寿司詰め合わせ (8,25€)

人々の仕事がどんどんオートメーション化され、AI 全盛時代が近づいているのかもしれませんが、私は「あなたの仕事をなくしたくない!」とレジの女性に伝えたつもりです。彼女はそれを理解してくれました。人々が「便利」や「効率」という点のみを考えることなく、シンギュラリティ（技術的特異点）の到来を遅くすることによって、異文化理解を超えた「人と人との交流」が長く続くように願っています。

漢字語にみる異文化

国際言語文化センター兼任研究員 谷守 正寛

言語を扱う立場から語の運用上気づきにくい異文化的な側面を考えたいと思います。中国語と共有される漢字語にも異文化がありえます。そこで社会活動上の影響をもたらすものを取り上げます。参考資料は『日中同形異義語 1500』、『日中辞典』（小学館）、『新明解国語辞典』、『中国語辞典』（白水社）、『ジーニアス英和大辞典』ですが、紙幅の関係上逐一個別の表示は略します。

検討：これは誤解や摩擦を起こしうる語でしょう。日本語では「ものごとをくわしく調べ考えること」、中国語では「欠点や過ちを調べ、原因を追求して自己批判をすること」とされます。それぞれ検討会は反省会、検討書は始末書と理解され、みんなの前で検討すると言えばみんなの前で自己批判することになります。業務文書で「その件については検討させていただきます」などと書けば、字面からは交渉において大きく譲歩したことになります。面白いことに「相手からの依頼・要求・勧誘に対して、『検討しておく』などの形で回答を保留し、相手に結論を示すのを意図的に遅らせるときにも用いられる」という辞書の説明がみられるように、日本人にとっては逆に交渉を優位に進める戦略的な語なので相手と衝突しかねません。英語では consider に該当しますが、「考慮に入れる、注意〔関心〕を払う」の意で、受身では「尊重される」という意味合いさえ持つ語です。もしアメリカとの交渉で日本側が否定的な態度として「検討しておきます」と言っても、通訳者がそのニュアンスを真逆に伝えたら大きなトラブルになります。もしや日本人が検討すると言うのを聞いて期待した相手が一向に「検討」しない姿勢に激怒して、1970年代の日米貿易摩擦を激化させたのかもしれない。日本人どおしなら「検討しておきます」と言われたら、半ばあきらめに近い期待感を抱くものですが、中国語ではおかしい解釈をされかねません。

了解：中国語では「客観的にものごとをよく知っていること」なので、日本語を話す中国人が「了解した」と言っても、日本語の「相手からの指示・命令に対して納得したことを表わす」、つまり「了承」の意味ではないので誤解が生じます。中国語では理解したことは「知道了」（チータオラ）、「明白了」（ミンパイラ）、「懂了」（ドンラ）となり、OK の意味を含む日本語の「了解」は中国語では「可以」（カーイー）、「行」（シン）となり「解」の字が出てきません。中国語の「理解」は感情の面から主観的に分かることとされて日本語と語感が違います。ちなみに、I understand は日本語のニュアンスに近いようです。

進出：日本語では「新しい活動領域に進み出ること」、中国語では「ある場所を出入りすること」です。日本が大陸を侵略したことを「進出」と言い換えて政治的に揉めたことがあります。大陸にただ出入りしたということにしたととらえられた可能性もありえます。日本語で「進出」は「進」と「出」が類義の関係にあります。中国語では対義になるわけです。ところが「進出」は両国語とも類義の字の組み合わせになるので同義語になり、ややこしいものです。同音の「侵入」なら明瞭ですが、日本語では「住居侵入」のように小さな領域に用いる語感があるので歴史用語にはなじまないわけです。

交流：これは中国語で「交換する、（経験・物資などを）交流する」意味で、「交流经验」と書けば「経験を交流する」という違和感のある意味になります。筆者の語感では人が行き来し意思疎通する場合に用いる語と考えます。文化交流と言ってもただの交換ではなく、人の交わりの中での知識・経験の紹介です。日本語ではコミュニケーションに近いでしょう。しかし中国語ではそれは通信（沟通）とか伝達と表し、日本語の「意思疎通」は言わないようです。交流すると言われても人の付き合いのない何かの交換の意味にもなりかねないわけです。

吟味：デカルトの方法論では疑いうるものを全て疑って真理に到達する思考作業で、筆者も好んで用いる語なのですが、中国語では文字どおり「詩歌などを吟じてよく味わうこと」なのです。ですからずいぶんと趣の異なる語です。これは日本では古くは「罪状を調べたこと」を表し、上記のように哲学の訳語に用いたことから派生したのかと推察しますが、詩歌の味わいとは真逆のとても理知的な精神作業なので、中国人からすると可笑しく見えるでしょう。

国際理解に必要な知識と能力とは？ ①

～日本は世界の標準か～

国際言語文化センター兼任研究員 小西 幸男

異なる国や違った背景を持つ外国の人々の文化・歴史・宗教・価値観を知り、理解しようとする姿勢や態度を「国際理解」と定義したなら、国際理解に必要な知識は何で、どのような観点で考えるべきであろうか？単なる言葉を理解するにとどまらない国際社会全体や相互理解をする姿勢が必要であり、平和・共存を考えるには違いを尊重し考える力が肝要となります。そのためには、日頃から国際問題に関心を持ち、国際的なニュースや世界のさまざまな課題（貧困、環境、紛争、社会制度、社会保障制度、医療制度など）に関心をもつことを心掛けなければいけません。

第二次世界大戦後に新しい日本国憲法が制定され、1946年当時の世界でもっとも平和で平等な国として日本を再建するために西洋の思想と制度が日本に導入されました。その後も日本では労働組合の活動や女性の参政権が認められ、社会参加が広がりました。また、男女平等、教育の普及・教育制度も国家主義から、個人尊重・民主主義へと転換しました。言論・報道の自由が保障され、外国との関係も軍事的支配から国際協調・平和外交中心に変わりました。現在の社会福祉の分野に至るまで、日本の社会は憲法を中心にした法的枠組み・政治体制・国民の意識・社会の価値観に加え、それまでの儒教の影響の強い社会構造や国民の意識は憲法改正とともに新しい民主主義と自由平等という権利のもとで発展し、戦後80年を迎えようとしています。日本国憲法の制定は、単なる法改正ではなく、「社会の価値観そのものの大転換」であったともいえます。

地理的な環境にも恵まれ、日本全土で山と海があり、その間には川が流れ、きれいな水が年中容易に手に入ります。様々な自然環境にも恵まれた国土を持つ私たちには当たり前のことが実は世界の他の国と比較するととても恵まれた特異なことかもしれません。国民が封建社会の独裁政権から自由民権を手にするのに多くの国が革命や戦争を経て手に入れてきました。日本は主権の所在も天皇に統治権がある体制から主権は国民にあり、政治権力は国民からゆだねられ、国民が政治の中心となる民主主義体制へ革命なくして転換した国です。社会福祉に関しても、他の先進国の制度を模倣しながらも日本独自のシステムを構築しています。ある意味独自の進化を遂げている国かもしれません。そんな日本に住む私たちは、他国や異文化圏のことを理解するときに日本を基準に物事を判断しているのではないのでしょうか。

例えば、他国との交渉について考えてみると「交渉」は単に言葉や文化の違いだけでなく、法制度の根本的な考え方にも左右されます。互いの法的常識が違っていれば、信頼関係や合意形成にも支障がでて不思議ではありません。法体系は、その国や地域の歴史や文化、思想、政治体系に深く関係しています。知識として、どのように日本と他国が違っているのかを考えてみたいと思います。

日本の法律（主に大陸法＝シビル・ロー）と英米法（コモン・ロー）は、法の発展過程・法源・裁判の進め方・法文化などにおいて根本的な違いがあります。また、世界にはほかの法体系もあります。代表的なものをあげると①大陸法系（シビル・ロー）、日本・ドイツ・フランス・韓国・ロシアなどがあり、成文法（条文）が中心となった法典化が進んでいます。法源は憲法・法律・命令・条例と成分化された法が上位にあり、裁判官は「法を適用する」役割を持っています。日本は基本的にこの大陸法系に属します。言い換えれば、ルールに沿って人々は物事を判断す

る傾向にあるといえるでしょう。ちなみに日本では憲法がすべての法の上位にあり、日本の法のヒエラルキーは憲法（最高法規）、条約（国際法に基づく）、法律（国会で制定）、政令（内閣が制定）、省令・府令（各省庁の規則）、条例（地方自治体）、判例（裁判所の判断・法的な拘束力は弱い重要な法の解釈の示唆）という構造になっており、裁判官は基本的に成文法に従って判断を下します。近年大陸法を基盤としつつも、一部に次に上げる英米法的手法（裁判官制度など）を併用しています。また、ロシアは旧ソ連時代にのちに掲げる社会主義的法系でありましたが、現在は基本構造が大陸法系になっています。しかし、1990年代に憲法、民法典を制定して法整備をしましたが、法の独立性が弱く、国家や政治権力（特に大統領）の影響が強く反映され、司法は政権に従属しやすく、法の恣意的運用が起きやすいと批判されています。檢察の権限が非常に強く、法による支配の傾向が強いという批判もあります。②英米法系（コモン・ロー）、イギリス・アメリカ・カナダ・オーストラリアなどがあり、過去の裁判が法の中心にあり、裁判の判決（判例）が法的拘束力を持ち、裁判官は事例ごとに「法を発見する」独創的な役割を担っています。成文化された法律があり、それをどのように状況に合わせて解釈するかが重要となり、新しい解釈によって物事を判断しようとする柔軟性をもっています。逆説的に考えるとこれまで常識とされていたことも新たに解釈されると覆されるという側面を持っているということかもしれません。③イスラム法系（シャリーア）、サウジアラビア・イラン・アフガニスタンなどがこの法系を持っており、特徴としては宗教（イスラム教）の教義を法としています。コーラン（イスラムの経典・法の最上位）、スンナ（預言者ムハンマドの言行）、法学者の解釈（イジュマー《法学者の共同解釈、時代や地域によって異なる》、キヤー《明記されていない事例を既存の規範から類推する方法》）が法源となっています。宗教上の教えが社会観にも強く影響をしている社会を築いているともいえるでしょう。④社会主義的法系（旧ソ連型）、旧ソ連・中国・ベトナム・北朝鮮などがあり、国家が法理を支配手段として使うという特徴を持っています。法は大義、すなわち、「人民の利益」や「社会主義のイデオロギー」に基づいており、国の方針や政策の方向で急に変化することもあります。「法の政治化」の典型です。

それぞれの国での法体系によって日常が守られたり、規範されたりする社会の中では、何を正しいと判断するかが場合によっては大きく違っていて、私たちが普段、「これが正義」と思っていることが必ずしも同じ理解の上で成り立っていないということがわかると思います。

今回は難しく思える法系と社会に焦点を当ててみましたが、国際理解では、宗教や文化、歴史や地政、経済を含む社会事情といったものも理解することでそれぞれの違いやなぜそのような発想になるかといったことがより明確にわかるようになります。



『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』（小熊英二）

講談社現代新書、2019

『日本社会のしくみ』は、学生の皆さんに是非読んでほしい本です。副題に「雇用・教育・福祉の歴史社会学」とあるように、日本独自の雇用、働き方に焦点を当て、そうした慣行がなぜ生まれたかを歴史的に辿り、雇用が教育や福祉と密接に結びついていることを示しています。

筆者が担当している講義科目「国際理解Ⅰ」、「ヨーロッパの言語と社会（フランス）」では、他国の働き方について議論しますが、フランスや中国を熟知するゲストスピーカーの共通する見解は「日本ほど大学卒業時の就職が容易で、雇用が安定している国はない」ということです。確かに、《新卒一括採用》が一般的な国は日本だけでしょう。こうした日本の慣行が生まれた歴史的経緯を、小熊氏は膨大な資料をもとに分析しています。「企業を超えた横断的基準の不在が、日本型雇用の最大の特徴である」（552頁）と小熊氏は結論づけ、教育について、アメリカが「市場志向」、ドイツが「資格志向」の教育体制であるのに対し、日本は「企業志向」であり、日本における学校の機能は「企業内訓練に応えられる潜在能力を持つ者を選抜することに特化した」（562頁）と説明しています。1990年代以降に喧伝された「成果主義」が中途半端に終わった点、経団連加盟企業が重視する能力の上位5つが従来から「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」「協調性」「誠実性」（542頁）である点も指摘しています。こうした能力は、受験戦争から解放された大学4年間で培いましょう。日本社会の雇用や教育がどのように成立してきたのか知ることは、今後の新たな波（外国人労働者との協働、AI等の活用）のなかで、日本社会がどう変わるのかを考えるヒントになるかもしれません。（中村典子）

『茶道と天下統一 — ニッポンの政治文化と「茶の湯」』（ヘルベルト・プルチョウ）

日経 BP マーケティング、2010

茶の湯、茶道といえば庭園、掛け軸、茶碗、美術品、作法や穏やかな時間の流れというイメージが真っ先に浮かび、日本の伝統文化をイメージさせます。今回のご紹介したい本は、ヘルベルト・プルチョウの書いた「茶の湯」の本です。

彼は、スイス生まれのアメリカの学者でイギリス、スイス、スペインで教育を受け、パリ大学でロシア語を専攻し、日本へは国費留学生として来日、アメリカで博士を取り、日本の大学で教鞭を取っていた日本文化研究者です。そんな彼が見た茶の湯の歴史は、豊かな文化の面だけではなく、戦国時代から江戸時代初期にかけて、武将たちが「茶の湯」をいかに国家儀礼として活用し、天下統一や政権構築に役立てたかについて国際日本学的な視点から書いています。茶の湯は、現代のように学歴といった教育の体系が整っていなかった時代に武士の世界で教養をはかる一つのツールであったのかもしれませんが。茶室を「政治儀礼空間」と位置づけ、形式・様式・茶器の選別などが君主の権威の象徴となったプロセスを詳細に分析しています。織部、遠州、石州などの茶人を通して、儒教的・制度的側面を取り組んで成立していく過程やヨーロッパの宮廷儀礼や儀式芸術と比較して、どのように政治の舞台で活用されたかを知ることができる面白い視点から書かれた一冊です。日本の政治文化の特異性や社会の構成を比較文化論の視点からも興味深く読み進めることができます。質素堅実な作法であるとされる「躰り口」や「わび茶」の空間が実は社会的ヒエラルキーを強化する逆説的な構造であったりと日本の文化を知るのに面白い新しい視点で学んでみませんか。大人の教養としてもおすすめの一冊です。

（小西幸男）